

天文同好會觀測部月報

太 陽 課

太 陽 黒 点 活 動 の 近 状

太陽面の黒点は、今まで本誌で度々くりかへし報じた通り、去る1928年に活動期の峠を越えたけれど、しかし、決して急に下り坂に向はないらしい。昨年などは、時々大變な黒点が現はれて、人々を驚かしてゐる。今、諏訪の三澤氏の觀測旬報を見ると、相對數は下の如くである。

年	月	毎旬平均	(日 數)	毎月平均	日 數	
1928年	7月	上旬	95.3	(7)	94.7	(28)
		中旬	96.4	(10)		
		下旬	92.8	(11)		
	8月	上旬	76.6	(10)	84.6	(31)
		中旬	126.9	(10)		
		下旬	58.7	(11)		
	9月	上旬	33.8	(5)	40.5	(19)
		中旬	46.9	(8)		
		下旬	37.7	(6)		
	10月	上旬	72.0	(8)	61.3	(23)
		中旬	50.7	(7)		
		下旬	59.9	(8)		
11月	上旬	79.1	(7)	87.8	(21)	
	中旬	85.8	(6)			
	下旬	96.6	(8)			
12月	上旬	126.9	(9)	145.5	(24)	
	中旬	164.7	(9)			
	下旬	145.3	(6)			
1930年	1月	上旬	74.4	(9)	86.3	(28)
		中旬	114.7	(10)		
		下旬	66.4	(9)		

これで見ると、昨年中に、黒点は、八月中旬と、十二月中旬とに最大活動を見せてゐる。八月中旬といへば、かのツエペリン大飛行船が世界一週の途上、シベリアの野を通つた時であつて、あの時、乗員たちが船中から見たといふ北天のオーロラは、全く此の時の太陽黒点の影響である。

又、十二月中の黒点活動は、實に近年にない猛烈なものであ

つて、三澤氏は十二月二十日前後に無慮十三群の黒点を見ておられ、此の月のレコードは、大正十年秋、三澤氏が観測を始められてから、全く例の無いことであつた。此の頃、我が地球上に於いても、磁氣嵐やオーロラが盛んに見え、又、全世界の各地が、或は嚴寒に襲はれたり、異常な温暖に見舞はれたりして、一般に何所でも「何十年ぶり」の珍しい天氣模様を驚いたのは、世人が皆今尙ほ記憶に新しいことである。（詳しくは京都花山ブレテンを見られよ。）

今後も、やはり、油断はならない。

彗 星 課

井 ル ク 彗 星

本誌前號附録に急報した如く、昨年末ポーランドのクラカウ天文臺で發見されたキルク彗星は、次のやうな電報によつて知らされたものであつた。

Comet Wilk 21070 December 17450 27130 05342 69992

Equinox 1855 Banachiewicz Stromgren

最後の檢算が合はないで始め吾々はまごついたが、後に、21070は20070の誤りであることを知つた。即ち電文の意味は、

キルク氏發見の新彗星、十二月20日17時45.⁰、光度7.0、
赤經271°30′、北極距離53°42′

である。之れは近來珍しい星であつて、光りも可なり強く、視運動も速かつた。始め、發見された時は琴座カ星附近にあつたが、それから、まつしぐらに東南へ移つて、年末には白鳥座ベ星の近くを通つて、狐座に入り、一月三日には海豚座、同十日には小馬座、十六日には水瓶座に入り、一月末には水瓶座ア星の南を通過して行つた。

軌道は、ポーランドのクラカウ天文臺長や、其の他多くの人

人が算出して發表したが、皆、拋物線形である。

軌道要素算出者	バナヒノ井ツ	バワノ等	バナヒノ井ツ(改)	神 田
近日点通過	1930年1月17. #290	同22. #28	同22. #259	同22. #2972
近日点引數	130° 25' } 178 58 } 20 57 } 56 17 }	157° 20' } 178 58 } 178 41 } 124 28 }	157° 8' } 178 41 } 124 31 }	157.° 4761 } 179. 0013 } 124. 5030 }
昇交点黄經				
軌道の傾斜				
近日点距離	0.7801	0.674	0.6736	0.672370
観測材料	? 十二月21-23日	同21-25日	同24日	一月1日, 同9日.

此の四種の軌道のうち、第一のものは、勿論、余りに不正確なものである。多分、神田氏のものが最も真に近いだらう。バナヒノ井ツ氏は、此の星が西暦1739年の大彗星と同じものだらうと言つてゐる。この1739年の彗星は、ラカイユの研究によれば軌道が

近日点通過	1739年六月17 #4229	(パリ時間)
近日点引數	104° 46' 34" } 207 25 14 } 124 17 16 }	(1739.0)
昇交点黄經		
軌道の傾斜		
近日点距離	0.67358	

であつて、著しくキルク彗星と似てゐる。

観測部流星課十月報告

課長 小 槻 孝 二 郎

十月に於ける流星観測者及観測數は下記の通りである。

No.	観 測 者	(略符)	観 測 地	時間數	個數
1	小 槻 孝 二 郎	(Ko)	和歌山縣有田郡金屋	5 m	2
2	原 田 參 太 郎	(Ha)	大分市大分橋通三丁目	595	49
3	武 重 燮 仙	(Ts)	長野市北石堂町	90	14
4	宮 原 亥 重 子	(Mi)	長野市南縣町	120	4
5	荒 木 健 兒	(Ar)	岡山縣玉島町八幡	1090	63
6	田 中 鉄 馬	(Ta)	福岡市外箱崎町中小路	930	66
7	小 林 正 久	(Kh)	東京市本郷區弓町2ノ4	40	1
8	高 城 武 夫	(Tk)	和歌山市上鷹匠町		1
9	山 崎 幸 夫	(Ya)	大阪府龍華町安中		2
10	改 發 香 嶋	(Ka)	神戸市西須磨	75	5

總観測時間數

2945分

總観測個數

207個

以上の流星を各日別に記せば

日付	観測者										計
	(Ko)	(Ha)	(Ts)	(Mi)	(Ar)	(Ta)	(Kh)	(Tk)	(Ya)	(Ka)	
1						4					4
4						8					8
5				2	10	6		1			19
6		9			17	10					36
7				1						5	6
8						6			1		7
13			6			1					7
15			8		6						14
16						0					0
17		3									3
18						0					0
20					4	1					5
21		0			6						6
23				1			1				2
27	2	14			9	21					46
28		10				6					16
29		5			15	3			1		24
30		8									8

(1) 十月中に観測されたる負二等以上の大流星を集録する。

日付	観測者	出現時刻 n m	確度	継続時間	光度	速度	色	其他	出現点		消滅点		流星群
									α	δ	α	δ	
5	(Tk)	19 6	4	6 s	-5?	VS	Y→ W.F	痕破裂	262.5	-23.5	257.5	-5	
15	(Ar)	4 42	3	0.2	-4.5	R	Y R	痕(4s)	169	+33	172	+34	
27	(ク)	2 15	2	0.8	-2	M	BW		76	-16	73	-22	Taurid?
30	(Ha)	1 47	3	0.3	Tup.	rR	R	痕	58.5	+26	33	+23	

(2) 流星群の出現状況

月明の関係で二十日前後に出現するオリオン座流星群及双子座流星群は殆んど観測出来なかつた。只岡山の荒木氏は二十日及二十一日に双子群を若干観測されてゐるが輻射点は決定し難い。

本月27日には九州に於て田中、原田二氏に依つて同一流星を観測された。負一等の急速の流星である。九州中部熊本縣の上空で高さは約百軒位である。詳しくは後にゆづる。

オリオン座の流星群は下旬に若干観測されてゐるが著るしい出現は見せなかつた。其他の流星群には著るしいものはない。

(3) 本月中の観測より得たる輻射点は次の通りである。

No.	日付	観測時間 (J.C.T.)	輻射点		個数	観測者	備考
			R. A.	Decl.			
1	5	ⁿ 1 ^m 40 — ⁿ 5 ^m 10	130	+3	4 } 4 } 8	(Ar)	δ-Hybrid
	6	3 0 — 5 10					
2	6	0 10 — 2 10	68	+13.5	4	(Ta)	α-Taurid
3	8	22 15 — 23 15	32	+11	3	(Ta)	
4	15	4 0 — 5 0	106	+31.5	4	(Ts)	
5	〃	4 2	190	+53		(Ts)	停止流星
6	27	2 3	110	+23		(Ta)(Ha)	同時観測
7	〃	23 2 — 23. 32	61	+24	3	(Ta)	
8	{27	23 2 — 23 32	50	+4.5	3 } 2 } 5	(Ta)	r-Taurid
	{28	22 18 — 23 18					
9	{27	23 2 — 23 32	37	+5	3 } 2 } 5	(Ta)	
	{28	22 18 — 23 18					
10	{27	23 2 — 23 32	90	+17	3 } 2 } 5	(Ta) (Ha)	Orionid
	{28	0 55 — 2 40					